

連載エッセイ
essay

第8回

1年目の勤務を 終えて



きしimoto みてき
岸本 海笛

(一財)
砂防・地すべり技術センター
斜面保全部 技師

私が砂防・地すべり技術センターに入社して1年が過ぎました。入社1年目の日々は慣れないことばかりで目まぐるしく過ぎていき、過去の事を振り返る機会があまりありませんでした。そこで今回の執筆を機に、1年間の仕事の中に感じたことや考えたことを回想してみることにしました。拙文ではありますが、1年間の勤務を通しての感想と今後の展望を記します。

1年間の勤務を通しての感想

この記事執筆している5月現在、新型コロナウイルスが5類感染症へ移行し、生活が以前のように戻りつつあるところですが、入社当初はまだ新型コロナウイルスが猛威を振るっており、先行きが十分に見えない状況に一抹の不安がありました。しかし、幸いなことにそのような心配は杞憂に終わり、気づけば1年が経っていました。

実際に働きだしてみると、学生の時に聞いたことはあったものの詳細を知らなかった事項や業務に関する事項等、自分が知らなかったことの多さを痛感しました。それらの事項の意味が分からないと先輩からの指示の意味も十分に理解することが難しいため、この1年間は特に必要な知識を身に着けることに努めてきました。知らない事項については都度調べたり、それでも分からなければ周囲の方に聞いたりして解決してきましたが、地すべりに関する検討では地形、地質、水文等分野が多岐に渡ることもあり、未だ十分に理解できたという実感を持つことはできていません。今後も分からないことがあれば、つぶさに解決していこうと思っています。

また、業務で実施した内容を相手に説明するこ

とについては、多々難しさを感じることもあり、業務を進める上では、検討結果を国等の事務所の方から大学の先生、協力会社の方、社内の上司と様々な方々に伝えて意見をいただく必要があります。入社間もない私が主となって説明する機会はあまり多くなかったのですが、相手に上手く伝わっていないのではないかと不安に感じることもあります。説明する中で言葉に詰まってしまうこともあり、その時に初めて内容を十分に理解していない箇所を発見することもありました。1年の業務を通して、相手に自らの考えていることを適切に伝えるためには、何よりも自分が十分に理解している必要があることを痛感しました。

加えて、仕事におけるコミュニケーションでは、自らの考えを適切に伝えることだけでなく、相手の要望を汲み取ることも同様に重要であると考えようになりました。この1年は内容を説明することで手一杯になっており、相手が何に困っていて、何を提案するのが良いか、ということに関してはあまり考えることはできていなかったように感じています。説明する相手に合わせて、諸先輩方のように臨機応変に説明の仕方を選択することができるようになりたいと思いました。これらのことは、今の私にとってとてつもなく大きな壁のように感じますが、焦らず少しずつできるようになっていこうと思います。

今後の展望

高校生の時に教わった言葉で「守破離」というものがあります。これは武道における修行の段階を示した言葉で、守は師の教えを守り身に着ける段階、破は既存の型を破り自らを模索する段階、離は師の教えから離れ独自の型を完成させる段階を示しています。今思い返すと、1年目の業務では上司や先輩

方に言われた通りに作業をすることが多かったように思います。ただ、作業を進める中で違和感を抱くことはあっても、それをうまく言い表すことができず重要なことなのかも判断できないことがありました。今後の業務ではまず業務の進め方を着実に身につけるとともに、疑問を持ったら何に疑問を感じているのか明確にする癖をつけていきたいと思います。また、それらの疑問について先輩方と意見を交わしながら、自らの考え方を磨いていきたいと考えています。

最後になりましたが、技術も知識も未熟な私を丁寧にご指導いただいた上司の方々、諸先輩方には大変感謝しております。まだ知らないことばかりではありますが、活躍できるよう日々精進していきますので今後も何卒よろしくお願い申し上げます。



現地調査時の打合せの様子（写真内左の人物が筆者）



地すべり地内で変状や湧水の分布状況を調査している様子